

塩見允枝子《空間的な詩》におけるリチャード・ハミルトン
— 「影のイベント」のレポートを中心に—

吉村 典子（宮城学院女子大学）

塩見允枝子(1938-)が1965年から75年にわたって行った《空間的な詩》(Spatial Poem)は、塩見の「指示書」を国内外のアーティスト達に郵送し、受け取った者達がその指示をそれぞれの解釈でそれぞれの地で行う「イベント」である。そしてその時の「行為」をレポートにして塩見に届ける。総計9種の「イベント」が行われ、400通以上が寄せられた。それらのレポートを塩見が「編集」して「詩」が完成する。レポートは塩見の作品を構成するものであり、参加者の思考や表現が個別にも表されている。

リチャード・ハミルトン(1922-2011)はこの「イベント」に3回参加し、それぞれのレポートを塩見に届けている。本研究は、ハミルトンに関する先行研究でも扱われることのないこれらのレポートを対象に考察を進め、単なる「イベント」の「行為」の記録以上の内容を含むこのレポートの特質を明らかにする。本発表では「影のイベント」(1971年)を中心に扱う。

塩見は「影のイベント」において、黒インクで「SHADOW」と印字した透明のフィルムを同封し、その「SHADOW」の影をつくる、つまり「影」の影をつくる依頼を「指示書」に書いた。返信されたレポートの多くには、多様な場に多様な形に映し出された影をとらえた写真がみられるが、ハミルトンは自身のレポートの上に影を映すという手法をとっている。具体的には、レポートを書いた紙の上に「SHADOW」の影をプロジェクターの光で映し出し、ポラロイド・カメラで撮影して、その写真をレポートに添付して返信している。

添付の写真からは、一見して一つの影が捉えられているようにみえるが、よくみると複数の影があることがわかる。レポートには「手順」として「投影を撮影」(“Projection Photographed”)と書かれており、プロジェクターによって映し出された影、それを捉えた写真にうつる影もまたその影であり、その写真にうつりこんでいる「SHADOW」の文字も、その写真においては「SHADOW」の文字の影であることに気づかされる。同時代のハミルトンの作品や言説等には、写真のネガとポジというメカニズムへの関心を読み取ることができ、意識的に写真を用いてこの行為およびレポートの作成に挑んだものと考えられる。

さらに着目すべき点は、レポートとして内容を考え、タイプ打ちしたレポート紙の上に影を投影したことである。添付した写真ではレポート上に写っている影が、塩見に届けられた時点ではレポート紙の上にはない。実際の影と写真の影との違いでもある。影がないことが実際にはあったことになるという逆説もここに示されている。ハミルトン自身の「パラドクス」についての言及やそれを示す作品は70年代前半に特にみられる。従って、「影のイベント」の頃のハミルトンの作品制作上の問題と関心をも投影するかたちで、塩見の「指示」に答えたレポートであるといえるであろう。